

## 業界短信

(2011年7月1日～7月31日)

### 韓・POSCO、厚板ミル拡張進む(産業新聞、7/2)

韓国のPOSCOは、浦項製鉄所の厚板ミルの生産能力を着実に拡大している。主力の第2厚板ミルは合理化努力によって、大きな設備変更を伴わずに、年産能力を270万トンレベルに(2005年時点:220万トン)拡大した。合理化努力で生産性を高めて浦項の3つのミルで年産500万トンの能力を確保し、光陽製鉄所の新ミル稼働後の2011年時点で、世界最大の年産700万トン体制を構築する。POSCOの08年の厚板生産は、473万8千トンと前年比24.2%増加し、製品群の中でも伸び率は高い。大きな設備投資を行わず、現場の改善運動を通じて、浦項で年産500万トンが達成可能だという。

### JFEスチール、厚板減産を強化(鉄鋼新聞、7/2)

JFEスチールは、造船を除く国内の建機・産機、重電、建築及び一般店売り分野向けを対象に、厚板の減産を強化する。市中における厚板の過剰在庫を圧縮し、需給改善を早期に図るため、4月から実施する引受量の大幅削減を、7月以降も継続。上期中をメドに在庫レベルを適正化することを目指す。具体的には、需給バランスの指標となる厚板シェアリング工業組合の9月末在庫率で、出荷量にもよるが、1.5～1.8ヶ月分(5月が2.9か月)が目安。その一環として、一般店売り分野の7～9月期における減産率は、4～6月期に比べ約30%、前年同期実績に比べて80%以上とする見通し。昨秋来の世界同時不況が、厚板の需給悪化に影響している。特に建機・産機需要は短期間で激減。関連するシャー・溶断業は受注量が半分以下に減る一方で膨大な手持ち在庫と契約残を抱え、今も調整に手間取る。建築鉄骨・一般店売り型のシャーや流通販売店も同様で、自社在庫の圧縮を最優先するため仕入れを抑制、メーカーへの先物申し込みを絞っている。メーカー側もJFESや新日本製鉄など国内厚板各社が引き受けをスキップ。JFESでは実需以上の生産抑制を引き続き継続・強化することで、在庫の適正化等を図る。

### 北陸スチール、社員“見える化”で安全確保(鉄鋼新聞、7/6)

北陸スチール(株)(石川県能美市、宇津直弘社長)は、現場の士気高揚に掲示物を活用している。同社は、産機・建機向けや建築鉄骨・橋梁向けを手掛け、石川本社工場のほか、富山、滑川の計3工場を持つ。各拠点の構内にはいたるところに掲示物が。各設備・ラインには取扱責任者・オペレータの氏名が記され、また工場入り口には工場の人員配置図が掲げられ、一目でわかるよう個々人の顔写真入りで紹介されている。さらには環境・安全掲示板を設置し、一人一人が労働安全衛生と作業環境改善・地球環境保全への取り組みを公約した「私の安全宣言」も掲示してある。

今年3月に、経営管理とリンクした環境マネジメントシステムである「エコステージ」

認証を取得。経営管理の観点で環境や安全に取り組む一環として個々人の意識を高めるためにも、実際に文言をに表して、周知する掲示物は有効のようだ。

### 中部鋼鉄、省エネ取り組みに注力（産業新聞、7/9）

中部鋼鉄(株)（名古屋市中川区、成田健一郎社長）は、今期から省エネ化に向けた取り組みをさらに強化する。本年4月に、省エネ目的の個別予算として、年間1億円を初計上。すでに太陽光発電装置の設置なども決定し、今後様々な具体策を検討していく方針。同社では、今年度から開始した中期経営計画のテーマの一つに「地域との共生を含めた環境対応」の強化を掲げており、省エネ活動もこの一環となる。同時に防災対策として、圧延工場の耐震化工事も約6億円を投じて実施する。基盤整備事業の実施と並行して工事を進め、完了は12年3月頃を予定。

### 村山鋼材の浦安倉庫、雨でも荷役作業円滑に（鉄鋼新聞、7/10）

村山鋼材(株)（東京都大田区、村山和雄社長）は、浦安倉庫の入出荷口に雨よけ用の屋根をかけた。これが出入りする運転手さんに好評だ。これまで雨天時はどうしても構内まで雨が降り込み、荷役作業中や伝票の受け渡しで、事務所を行き来する際、雨に濡れるのが避けられなかった。ただでさえ作業性が悪くなるだけでなく、足場も滑りやすくなり、危険も伴った。また浦安倉庫では構内を安全に歩行できる手摺付きの専用回廊も設置した。コイルや厚板が多い時には4万5千トン前後も保管される倉庫内。特に段積みされた原コイルは、地震時など有事の際、万が一にも傾いたり荷崩れすれば一大事になりかねない。

### 東国製鋼、新厚板ミル今月末試運転（産業新聞、7/16）

韓国の東国製鋼は今月末、唐津に新設中の厚板ミルの試運転を開始する。すでに工事は9割以上完了しており、最終段階に入っている。当初11月だった試験生産開始は早ければ9月に前倒しできるという。造船材需要はピークより鈍化したものの、需要家の在庫調整が進み、足元では厚板受注も回復し始めている。新ミルで各国の造船規格取得など生産、販売体制固めを急ぎ、2010年初めをメドに商業生産に移行したい考えだ。同社は、浦項工場で年産100万トンの第1厚板ミル、190万トンの第2ミルを操業しており、新ミル稼働で年産能力は440万トンに拡大。

### 奥田スチール、開先加工を短納期化（鉄鋼新聞、7/29）

奥田スチール(株)（岐阜県各務原市、奥田太一郎社長）は、鋼板加工分野で高付加価値加工の比率拡大を目指す。その一環として、開先加工のプログラミング時間を大幅に短縮できる新システムを導入したほか、大型プラズマ切断機を改造し、最大2ミリのY開先ルートフェイス残しをプラズマだけで行える体制を確立した。同社は、一般鋼材・ステンレスの販売や、橋梁、建機関連を主力とする鋼板の切断、開先、穴あけ、曲げ、溶接などを行う。鋼板加工では、プラズマ3基のほか、ガス2基を持ち、加工能力は月間1500トン程度。最近では、昨年初めに導入した大型プラズマを用いて、建機などの部材で必要となるY開先加工の低コスト化、短工期化に向けた取り組みを推進。